

秋入学への意見を寄稿してもらつた本シリーズの最終回は、構想を提起した浜田純一東京大学学長（総長）。浜田氏は秋入学はグローバル人材の育成環境を整備する大学と社会の改革運動だといつ。



東京大学学長 浜田純一

## 秋入学について考える

(9)

は「自己目的ではない」意識の変化が生まれてい打ち出の小づちではない」と何度も繰り返してきたことだ。秋入学の賛成・反対を論じた構想は、さまざまな教育改革や社会システム改革と連動してこそ意味を持つのであり、またそうした改革や社会システム改革への違いを過度にうんぬんは清水孝雄理事副学長が加速する効果を現に生み出している。

報告書を総長に提出し、誤解を恐れずに言え、その役割を終えた。そこでは、秋入学構想の意義を取り組む必要のある諸課題が掲げられている。

## 大学と社会総合改革

### 構想共有に意味

1年前は、さほど注目される「グローバル人材」や「タフな人材」を育成しない小さな一步だ。しかし、ここに至る間に状況は大きく変わった。秋入学にどのような立場をとるにせよ、グローバル化など現代の重要な課題に対応できる教養と取り組みのプロセスも大きな意味がある。

入学時期の変更だけでこのダイナミックな制度の工夫が試みられ、秋入学は自明である。秋入学の在り方を考え、ようという社会的機運が大きく高まつた。

### 10年先見据える

秋入学の構想についての意見が、さまざまと考へてある。1つ目は、学事暦の変更といわゆる

# 教育

## 国際人育成へむ 意識変化生む

界と同じ平面に立ち、言葉を交換すれば、日本という枠を取り払ったグローバルな大平原で、能力を競い合い、また協調していくとするマインドセットを大学にも社会にも根付かせることである。

学生たちが社会で本格的に活躍する10年後、20年後、時代の様相はどんなに大きく変わっている。現状の継続性の受け入れも増やし学生の多様性を高めたい。

2つ目は、こうした条件づくりである。留学件の意義を実質化させていく総合的な教育改革と、社会システム改革の誘導。そして3つ目は、世

先日、私は「改めて、

については「課題があるか

た検討と取り組みを進め

たい。今は秋入学につい

て構想を提起する段階か

ら、可能なトライアルを

行いつつ慎重論もしつか

り消して、次の段階に入っている。

東京大学130年余の歴史において、最初の約45年間、つまり3分の1は秋入学だった。1921年に諸学校の学年暦変更の動きや徴兵制度への対応などのため4月入学に改めた。議論当時の山川健次郎総長の文部大臣への上申書に「止ムヲ得メ」4月に改める記述されている。

幅広い連携探る

目下、高度なグローバル人材の育成を志向する12大学で総合的な教育改革をすみやかに推進するための協議体をつくろうとした。この構成員は、大学の構成員に発した。その中では、本学が取り組む課題として、入試改革や教養教育の高度化、教育システム改革と意識改革等を掲げ、再確認した。多くは、すでに取り組みが始まつておらず、それらの取り組みを着実に進めていくことが秋入学構想の実質化につながる。

現状だけを前提に議論していると、すべての物事が動かなくなってしまう。私たちのこれまでの暗黙の前提も問い合わせて、最善の時期・回数などの見直しを行ってもらわない

ことが、学生と社会に対する

責任である。

まだ秋入学の構想の大枠ないし理念型が提示さればかりである。本学においても、総合的な教育改革を進めていく中で課題をさらに消化し

総合的な教育改革に向けて「」というメッセージを大学の構成員に発した。その中では、本学が取り組む課題として、入試改革や教養教育の高度化、教育システムの国際化等を掲げ、再確認した。多くは、すでに取り組みが始まつており、それらの取り組みを着実に進めていくことが秋入学構想の実質化につながる。

現状だけを前提に議論していると、すべての物事が動かなくなってしまう。私たちのこれまでの暗黙の前提も問い合わせて、最善の時期・回数などの見直しを行ってもらわないことが、学生と社会に対する責任である。